

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32613

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26870652

研究課題名(和文) 子ども・子育て期の親が復興の主体となる支援システム 3つの大震災を事例として

研究課題名(英文) Support systems that position children and their parent as the drivers of recovery; Case studies of three large-scale earthquakes

研究代表者

安部 芳絵 (Abe, Yoshie)

工学院大学・教育推進機構(公私立大学の部局等)・准教授

研究者番号：90386574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究で得られた知見は以下の4点である。子どもの回復と成長の鍵は、遊びや表現であること。子どもの自己回復力を基盤としたソーシャルワーク的なアプローチが、子どもの回復を支えたこと。支援者が自らの支援行為を子どもの最善の利益の視点で省察したことが「支持的な他者」を生み出し、それが子どものPTGへつながったこと。支援システムの構築には、支援者が実践を通して得た暗黙知を言語化し、実践知として広く共有することが求められること。

研究成果の概要(英文)：The research project yielded the following four findings. (1) Play and creative expression hold the keys to the child's recovery and growth. (2) The child's recovery was supported by a social work-oriented approach grounded in the child's self-healing power. (3) When the supporters reflected whether their acts of support are in the best interests of the child, it produced the "supportive other," which in turn helped the child achieve PTG. (4) Support systems should encourage supporters to verbalize the tacit knowledge they have acquired in the course of their practice and then share it broadly as practical knowledge.

研究分野：子ども学

キーワード：災害と子ども支援 子育て支援 レジリエンス PTG ゆらぎ 子ども参加 東日本大震災 災害とジェンダー

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災復興支援活動の課題の1つは、これまでボランティアや NGO/NPO が手探りで担ってきた支援実践を、いかにして地域に根付く支援に転化させていくか、である。

支援の成立には、1つ1つの支援行為だけでなく支援システムが必要となるが、東日本大震災における子ども・子育て支援に関して、支援行為の実践分析や理論化はなされてきたものの、個々の支援がいかに巨視的なシステムとなりうるのかについては実践的にも研究的にも十分議論がなされてこなかった。そのため、NGO/NPO の撤退に伴い、支援が途絶え、子どもの生活が脅かされるという事態も生じつつある。この課題に向き合うためには、支援行為がどのようにして支援システムに変容しうるかを明らかにし、地域に返していく必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、子ども・子育て期の親が復興の主体となることを可能にする支援システムがどのように構築されうるのかを、支援者の専門性の観点から実証的に明らかにするものである。

具体的には、東日本・中越・阪神淡路大震災被災地域における子ども・子育て支援者が現場で直面する不安・葛藤すなわち「ゆらぎ」に着目し、その後に生じる支援者の自己変容と環境への働きかけに至る過程を、システム構築の発芽とみなし、「ゆらぎ」が新しい支援システムを産みだしていくプロセスを可視化した。これにより、転換期を迎えた被災地の子ども・子育て支援に新たな視点を提供し、これにより被災の当事者である子ども・子育て期の親が復興の担い手となる道筋を示した。

3. 研究の方法

本研究は、東日本大震災市町村復興計画、阪神淡路大震災教育復興担当教員、東日本大震災子ども支援 中越大震災子育て支

援の4つを調査対象とした。

方法としては(a)文献調査、(b)子ども・子育て支援者へのインタビュー調査と(c)研究の公表(中間まとめ含む)であり、支援者の「ゆらぎ」が新しい支援システムを産みだしていくプロセスを実証的に明らかにすることを目的とした。

本研究は4年間にわたる計画であるが、前科研・特定課題によるインタビュー調査先から継続的な関わりが求められていることから、1~3年目までは~を網羅的に調査し、4年目は補完が必要な項目を設定した上で、追加調査と総括を実施した。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の4点である。子どもの回復と成長の鍵は、遊びや表現であること。子どもの自己回復力を基盤としたソーシャルワーク的なアプローチが、子どもの回復を支えたこと。支援者が自らの支援行為を子どもの最善の利益の視点で省察したことが「支持的な他者」を生み出し、それが子どものPTGへつながったこと。支援システムの構築には、支援者が実践を通して得た暗黙知を言語化し、実践知として広く共有することが求められること。

当初予想しなかった知見としては、災害後の支援者が直面した「ゆらぎ」の大きさと、ゆらぎを乗り越えた支援者自身の成長、そしてその結果が制度化の端緒となった、そのプロセスが明らかとなったことである。

たとえば、東日本大震災発災直後より、「災害遊び」は子どもの回復を促すものとして報道されたが、実際に「災害遊び」に直面した支援者たちはそれを知識として知っていても動揺し、止めたほうがいいのではないかと葛藤した。中越大震災では、ジェンダー学習の積み重ねをしていた市民でさえ、母親に対して強化されるジェンダーに戸惑いと無力感を感じた。阪神・淡路大震災後の教育復興担当教員は、心のケアの専門性のなさに自信

をなくし、もがいた。それぞれの支援者たちは、「ゆらぎ」の大きさに戸惑い、現場でもがき苦しんだ。なかには支援を辞めた者もいたが、「ゆらぎ」に直面しながらも、原点である「子どもや子育て期の親にとって一番いいことはなんだろうか」と問い続けた支援者たちは、新しい実践を生み出し、制度へとつなげていった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

安部芳絵「災害とジェンダー ひとりひとりが主体となる災害復興に向けて」・生活協同組合研究・506 巻・pp.22-29・2018 年、依頼有

安部芳絵「兵庫県立舞子高等学校環境防災科における教育課程の編成 防災を通して学校と社会をつなぐ試み」工学院大学教職課程・学芸員課程年報第 20 号、pp.78-85、2018 年

安部芳絵「災害後のケアを子ども中心にするために～子ども支援専門職に必要な「参加」の視点～」診断と治療社『チャイルドヘルス』第 20 巻・12 号、pp.20-23、2017 年、依頼有

安部芳絵「宮城県石巻市における震災後の子ども参加支援と語り継ぐ主体形成の課題 SCJ「子ども参加に関する意識調査」2011～2015 を通して」子どもの権利研究第 28 号、pp.251-262、2017 年、査読有

安部芳絵「広域災害にあった子どものレジリエンスとその支援 学校現場で養護教諭は何ができるのか」東山書房、『健康教室』第 67 巻 2 号、pp.26-27、2016 年、依頼有

安部芳絵「東日本大震災に学ぶ子ども支援の課題 子どもの権利条約の視点から」国際人権ひろば、120 号、2015 年、依頼有

安部芳絵「生徒指導・教育相談・進路指導の理論と方法 被災地域における生徒指導実践を通しての考察」工学院大学教職課

程・学芸員課程年報第 17 号、pp.104-113、2015 年

[学会発表](計7件)

安部芳絵「復興のまちづくりへの新たな視点 保護の対象から参加の主体としての子ども支援に向けて」第 12 回こども環境学会論文・著作賞受賞記念講演、2017 年 5 月 27 日、北海道文教大学(単著『災害と子ども支援』学文社、2016 による受賞)

安部芳絵「復興のまちづくりと「子どもたち」」第 30 回ウィルながおかフォーラム、ウィメンズスタディズ・ネットワーキング、新潟県中越大震災「わたしの震災復興」を推進する会、2016 年 11 月 19 日、まちなかキャンパス長岡

安部芳絵・津田知子「SCJ「子ども参加に関する意識調査」結果にみる震災後の子どもたち 石巻市・2011～2015 調査比較」子どもの権利条約総合研究所 2016 年度研究発表、2016 年 6 月 5 日、早稲田大学

安部芳絵「災害後における子どもの心のケアの課題 教育復興担当教員の再評価を通して」日本教育政策学会第 22 回大会、2015 年 7 月 4 日、福島大学

安部芳絵「東日本大震災に学ぶ子ども支援の課題 子どもの権利条約の視点から -」設立 20 周年記念シンポジウム「次の世代に人権を」、一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター、2014 年 12 月 14 日、たかつガーデン

安部芳絵「阪神・淡路大震災と子ども支援 教育復興担当教員に焦点を当てて」早稲田大学文学学術院教育学会 2014 年度大会、2014 年 7 月 19 日、早稲田大学

安部芳絵「防災と子育て支援 新潟県長岡市の事例を中心に」日本教育政策学会第 21 回大会、2014 年 7 月 5 日、東京大学

[図書](計3件)

望月雅和編、安部芳絵ほか著『子育てとケアの原理』北樹出版、2018 年、pp.12-34

安部芳絵『災害と子ども支援 復興のまちづくりに子ども参加を』学文社、2016年、全248頁

鎌田薫監修、安部芳絵ほか著『震災後に考える 東日本大震災と向き合う 92 の分析と提言』早稲田大学出版部、2015年、646 - 655頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

HP 掲載等

「広域災害にあった子どものレジリエンスとその支援 学校現場で養護教諭は何かできるのか」*熊本地震発災に際し、『健康教室』2016年2月号掲載分を東山書房の協力のもとHPにて無料公開。

http://www.higashiyama.co.jp/user_data/kumamoto_jishin.php

兵庫県教育委員会教職員用指導資料『男女共同参画社会の実現をめざす教育の実践に向けて』(改訂版)において高等学校向け指導教材「男女共同参画社会と防災を関連づけた学びを行う」として、2018年3月に本研究成果が紹介された。

http://www.hyogo-c.ed.jp/~jinken-bo/danjo/dannjiyukilyoudou/kaitai/koutougakko_u14.pdf

報道(テレビ・新聞など)

NHK 宇都宮放送局「とちぎ 640」記者リポ

ート「足利防災ワークショップ」有識者のコメント(2017年10月25日放送)

石巻日日新聞「こども委員利用者目線で意見発表」2017年10月6日付

このほか、「全私学新聞」「今日新聞」「河北新報」「週刊教育史料」「We Learn」「子どもの権利研究」「教育学研究」「ジェンダー研究 21」「教育政策学会年報」にて科研費の成果をまとめた単著が紹介された。

アウトリーチ

科研費の成果をもとに下記の招待講演を行った。

安部芳絵「南海トラフ巨大地震に向けて、中高生は何かできるのか(講義)」「地域の若い力をどうコーディネートするか-災害復興期の社会教育の役割(演習)」平成29年度大分県第3回社会教育主事等専門研修講師、2018年1月18日、大分県立図書館

安部芳絵「子どもの参画 子ども主体性・自主性を育む児童館活動-」平成29年度宮城県児童館長研修会、宮城県子ども総合センター、2017年8月28日、まなウェルみやぎ

安部芳絵「防災と子ども参加 東日本大震災、そのとき中高生はどう動いたのか」子どもの安全、安心のまちづくり第3回市民公開学習会、足利市第三者調査委員会報告書を読む会、2016年7月31日、足利市民プラザ本館

報告書

科研費の研究成果をもとに下記の報告書に執筆協力を行った。

安部芳絵「「らいつ」が培った子ども参加の成果と子どもたちの力(依頼有)」石巻市子どもセンター(らいつ)指定管理者選定子ども委員の活動報告、2017年

安部芳絵「専門家の声(依頼有)」Next S0FT 中間報告書 (公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン) p.24、2015年

安部芳絵「専門家の声(依頼有)」Future

SOFT 中間報告書（公益社団法人セーブ・ザ・
チルドレン・ジャパン） p.20、2014 年

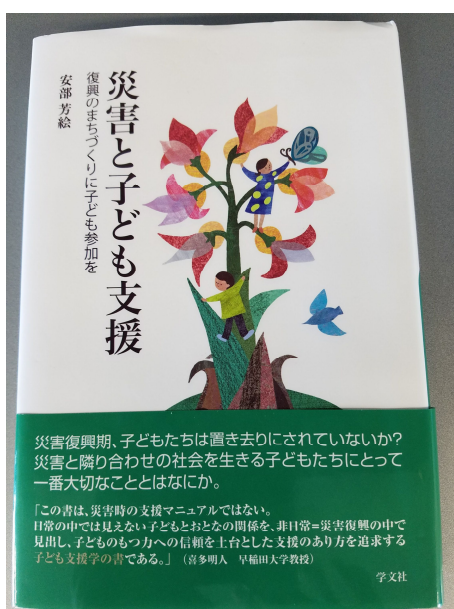
安部芳絵「有識者からの講評（依頼有）」
サントリー セーブ・ザ・チルドレン・ジャ
パン『フクシマススムプロジェクト 2013 年
度助成事業報告書』、pp.8-9、2014 年

受賞

科研費の成果をまとめた著書が、下記の賞を
受賞した。

第 11 回生協総研賞研究賞（2017）

第 12 回こども環境学会論文・著作賞(2017)



6. 研究組織

(1) 研究代表者

安部芳絵（ABE Yoshie）

工学院大学・教育推進機構・准教授

研究者番号：90386574

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

三浦玲（MIURA Rei）

宮城県気仙沼市立大谷中学校・教諭

鈴木祐司（SUZUKI Yuji）

一般財団法人地域創造基金みやぎ・常務理

事